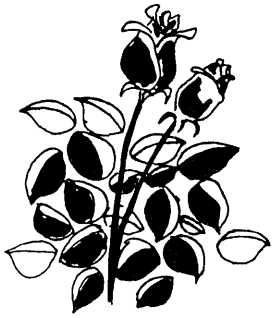
若いお母さんたちへ

「育てる」ってむずかしい



はるにれの会

入江　礼子

＜エピソード①＞

「あれっ、この洋服、あや（長女九才）が着ていた時、いくつだったっけ？」（私）

「これー、あたし年少組（幼稚園の）の時に着ていたわよ。忘れちゃったの、お母様、全く忘れっぽいんだからあ」（あや）

「そうよねえ……」（私）

私は思わず考え込んでしまいました。今、かおり（五才、二女）が着ているピンクのジャンパースカートは、確か、あやも同じ年齢で着ていた記憶があったのですが、本当に、こんなにちっちゃかったかしら……。私の記憶の中では、あやは、このジャンパースカートをはいていた時、もっとずーっとずーっとお姉さんぽかったし、私も、今のかおりのような

扱いはせずに、ずっと大人っぽく扱っていたと思うのです。私は、あわてて古いアルバムを引っぱり出してきました。そしてそこからそのジャンパースカートを着たあやの表情をみてとって、愕然としてしまいました。そこに居たのは、私の中にイメージとしてある大人っぽいあやではなくて、今、ここに、ピンクのジャンパースカートをはいて立っているかおりにそっくりの幼ない表情をしたあやだったのです。

このところ、私は、私から生まれたはずの三人の子ども達が、本当に、私のお腹から生まれてきたのかを疑いたくなるほど、三人がそれぞれ違う育ち方をしてきたことに気付かされることが多くなっていました。人間には個性があるのだから、そんなことは当り前のことだと片付けてしまうのは、いとも簡単なのですが、どうもそれだけでは割り切れないのです。上二人は、女と男でしたから、その違いを性差に求めたりすることもあったりして、あまり私の中では、問題になりませんでした。それが、かおりの場合、上と同様女の子です。ですから、同じ条件のはずとつい考えてしまうのですが、実は、それは大きな間違いだったようです。

子どもを育てる時、育てている私自身は、全く無意識であったのですが、その養育態度は、子どもによって随分違ってしまったというのが、今の私の実感です。意識の上では、三人に対して、ともかく平等に、平等にと心掛けて育ててきたつもりでした。でも、現実には、その子をとらえる私自身のみる目とでもいうものが、違っていたようです。ですから、冒頭に述べたような事実に出会った時、私は、全く打ちのめされてしまいました。

一体、何が違うのでしょう。一人目、二人目、三人目となるに従って、私の育児というものに対する気負いが、減ってきたことは確かです。一人目が、まだ新生児の時、鼻水をたらしただけで、ひょっとすると死んでしまうのではないかという不安にかられたことがあったのですが、二人目以降は、そこまで思いつめることはありませんでした。又、一番上には、常に、「早く大きくなれ、早く大きくなれ」という気持ちが働きますが、（そ

れは、子どもが幼ない時代に限らず、大きくなった今でも続いています。）二人目以降は、そう急ぐ気持ちは少くなり、今のあるがままの姿を認めやすくなります。時として、認めやすくなる度を越して、「今のまま」の停滞を無意識のうちに望んでいることなきにしもあらずです。そういう私自身の無意識のうちに持っていた子どもに対する接し方の違いが、先程のエピソードの中にあるように、「こんなに小さかったかしら……」の驚きに出てきたのだと思います。

ところで、最初に生まれてきた子に対する親の態度と、それ以降に生まれてきた子どもに対する親の態度の違いは、私の場合に限らず、色々なところで散見されます。その態度に対して親自身が自覚的であることもあるし、全く無意識であることもあるしといった具合で、ケースケースによって様々ですが、「違いがある」ということだけは、どうも確かなようなのです。

こういうことは、何も現代に限ったことではなく、昔から、生まれて来た順によって性格が違う子が育つことを、「惣領の甚六」とか、「末っ子は三文安い」とか「三男のあばれん坊」というふうに、色々と、言い習わされています。ただ、現代と、そういう言葉が生まれてきた時代の相違を挙げるとすれば、子がそのように育つことを、自然だと考えていたのが昔であり、現代の特徴は、それが悩みになるということだと思われます。

実際、私自身も、いわゆる子ども達に対する平等を心掛けてきたつもりだっただけに、自分の感じ方が無意識のうちに違っていたことに対して、驚きを禁じ得なかったわけです。

＜エピソード②＞

「キンコンカンコーン、キンコンカンコーン」

「あっ、五時の鐘だわ。あやちゃーん、いつものやることやっちゃいなさーい。もう五時よーっ。」（私）

「うーん、わかってるう。」（あや）

「勉強するんだったら、国語だけじゃなくて、算数もちゃんとやるのよ。そういえば、このごろちょっぴり、

ピアノに身が入ってないんじゃない？」（私）

「もう、お母様ったらあ、私が、ちゃんとやりはじめようとすると、なんだかんだと言うんだからあ。もう、一人で出来るんだからあっち、行ってよ」（あや）

「……。ターちゃん、今日宿題ないの？　じゃ、ピアノ済ませちゃおうか。」（私）

「わかったよ。宿題はあとでやるから、ピアノついてよ。僕の時は、いつもあんまりついてくれないんだから。」（たかし）

「そうねえ、今、お鍋を火にかけてるから、これが終ったら、ついてあげるわ」（私）

「あーあ、また一人か。いつもそうなんだからなあ……」（たかし）

「かおりは、本読んでようっと、今日幼稚園から借りてきた〈山おとこのてぶくろ〉っていうの。ちょっと恐いんだよ。今は一人で読むから、夜、寝る時は、お母ちゃまが読んでね。」（かおり）

「わかったわ。随分一人で読めるようになったのねえ。」（私）

エピソード②のこれらの会話は、我が家の最近の夕方五時から六時の間に、大てい平均的にかわされるものの一部です。パターン化してしまったかと自分でも思う程、ほとんど変わらずにかわされるこれらの会話群は、今の私と子ども達の関係を端的にあらわしています。

まず長女あやに対して。全く自分でもいやになる程、この種の言葉かけが多く、口をついて出てくる度に、自己嫌悪に陥ってしまいます。そうなるものなら、そういうことをやめたらよさそうなのに、どういうわけか、いつまでもいつまでもそこから脱脚出来ずにいます。よく「這えば立て、立てば歩めの親心」と言いますが、私の場合、あやに関しては、いつも、這うのを待てず、立てるのを待てず、歩むのを待てないように思うのです。それこそ、その前にあれやこれや手を貸してしまって、本人の中で期が熟する前に、一見それが出来るようにしてしまっているところがあるわけです。冷静になって考えてみれば、三年生を過ぎるあたりから、自分で自分の道

を切り開いていこうという気持ちが、かなり強く芽生えてきて、四年生になってからは、今迄机を並べていた（最も、この机も三年生のはじめまでは、物置同様でしたが……）弟と別れて、自分一人のスペースが欲しいと、同じ部屋の反対側に出て行って、そのスペースを自分のものとして、きっちりと管理することが出来るようになっているのです。勉強だって好きなものは、どんどんやっているようだしピアノも既に私の実力を越えているので、一人でやっているのです。にも拘らず、私は、相変らず、まるで完全人間を求めるように、あやに対しては、干渉がましい口が多く出てしまいます。自分自身が四年生の時には、あやほど自発的に色々な物事に取り組んでいなかったはずなのに、どういうわけか、あやに対しては、求め続けているのです。生まれた時から、この方があやにとっては最善に近いだろうと考えながら育て続けてきた結果がこれなのかとも思います。彼女に「あっち、行っててよ」と拒否されてはじめて「しまった、今日もまたやってしまった。」と気付くわけです。

それならば、同じようにたかしにそうしているかというと、答えは「否」です。あやが二年生の時は、私もあやと一緒にピアノの傍らにいました。ところがところがです。五時という夕食の仕度時ということもありますが、たかしの場合にはやはり、彼に呼ばれるまで、私の方からやろうやろうと誘うことは非常に少ないわけです。たかしは、いつも少し待たされ、「さあ、じゃ、一緒にやろうか」と私が声を掛けた時は「もう自分で出来ちゃったよ」と相成る始末。気がついたら出来ていたということがあやの何倍もあります。それから、たかしに対しては、あやに求めるほど完全を求めていないようなのです。（「ようなのです」というのは随分変な言い方ですが、私の意識の上では、ともかく平等にしているつもりですから、本当はそういうことはあり得ないはずなのですが、そうなってしまうという意味です。）例えば、テストを彼らが持って帰って来た時の私の気持ちに、それはストレートに反映されます。まずあやが六十点を取って来た場合。私の目は、六十点という数字に釘付けに

なり、「なにっ、六十点、これは一体何事ぞ。そういえば、あなたは、私の言う通りにしなかったから云々……。」と次々と罵声が口をついて出て来るか、或は、少し理性が勝っている時は、その言葉をぐっと飲み込んでみたものの、顔は無表情な能面のようになり、その凍てついた顔みて、あやは言葉以上に私の言いたいことを悟るということになるわけです。これがたかしの場合。「なになに（という余裕がある）六十点。フムフム、あっ、ここのところ読まないで答えをかいちゃったんでしょ、ここ、読んでごらん。そう、そうでしょ。だとすると答えはどうなるわけ？」とゆっくり二人でその答案用紙を見返します。大筋のところが理解出来ているのがわかれば、「これから、ちゃんと読んでやらなきゃだめなのよ。」の一言で、たかしは、無罪放免となります。私の方も、あやの時のような感情の高ぶりはなく、基本をつかんでいるのだから問題なしという気持ちになるわけです。自分でも、これが同じ自分かと思う程の違いにいつも唖然とさせられています。そういうことを何回か重ねるうちに、私もこれではいけないと思い、あやの時は、一呼吸置いてから、事に臨むようにしているのですが、これは自然に湧いてくる気持ちとは逆なので、そうすることに努力がいります。努力は、ぎごちなさを伴いますから、子どもの直観は、多分私の本当の感情を見抜いていることでしょう。

さて三番目のかおり、夕方のこの時のエピソードでもわかるように、私は彼女に一言も言葉かけをしていません。たかしにまでは声をかけても……です。私が上の二人とゴチャゴチャやっているうちに、かおりは、その場の状況をさっと判断して、自分が、今、何をなすべきかをいちはやく悟り、即、それを実行に移します。そして、かおりの方から私に語りかけ、私は、いつも「えっ、そういうことも出来ていたの？これも出来ていたの、えっ、あれもそうなの？」という具合に、私が気付いた時には、とっくに色々なことが出来るようになっているのです。そして、おまけに、今、自分は一人でこれをするけれど、夜眠る時は、私にその本を読んで欲しい

と、次の要求をちゃんと出して来るのです。道をみつけるのは母親の私ではなく、子ども自身であるということを、私に考えさせる暇もなく、ちゃんと、自分で道をみつけて、それを示してくれます。かおりからみれば、母親というものは、自分の方から、要求を出さない限り、サッサと動いてくれない存在であるのでしょう。恐らく生まれた時から……。かおりはともかく一才までは、良く泣く子でした。〇ヶ月の時には既に抱きぐせがついていたくらいです。私は、夏だったので暑いから泣きが多いのかと思ったりもしましたが、やはりそれだけではなかったようです。食べることに関して言えば、食卓につくと、あっという間に手でどんどん食べる子どもでした。単に食が太いだけでなく、「自分で食べなければ。食べさせてもらう順番など待っていられない。」といった心境だったのでしょう。第一子のあやの時、口に入れてあげたもの（自分から手づかみでとったものではない）をいつまでも呑み込まず、延々と口の中に入れていたのとは好対照です。その点ではたかしもかおりに近い、手づかみ組です。そして、私自身も無意識にしていれば、かおりは、いつもいつも小さい存在。彼女の方から道筋を示されてはじめて、その成長にびっくりする程なのです。「あれっ、もう這った。あれっ、もう立っちゃった。あれっ、もう歩いている。嘘みたい！」という具合です。同じ親にして、この違い、しかも、何回も述べるように、私自身は、意識して、子どもたちに不公平のないように、誰か一人があまりさみしい思いをしないようにと、心掛けていて、この有様なのです。

多分、こういうことは我が家だけの問題ではないのでしょう。子連れのお母さんの集まりに行く度に、また身近な人の子育ての様子をみるたびに思うことがあります。それは、長男、長女、つまり一等最初に生まれてきた子どもに対するお母さんの眼差と、第二子以降に注ぐ眼差の違いです。はじめの子どもに対しては、母親は、より教育的な母親のように見受けられます。〇才代はいざ知らず、その後に見せる自然の母親の笑顔は恐らく、第二子以降と比べてずっと少ないのではないでしょう

か。特に屈託のない笑顔が……。教育的に良かれと思って作られた笑顔は多いかもしれませんが……。上、下二人のお子さんを連れているお母さん方をそーっとみていると、その表情の違いにびっくりすることの何と多いことか。上の子に対しては堅いなあと思うことが多く、下の子に対しては、もっと伸びやかであったり、仕方がないという諦めであるのではないかと思ったり。こっちとあっちをむいている時では、全く違った顔をみせているわけです。

上の子に対しては、どうしても気負いと一体感があるのではないでしょうか。それが良いとか悪いとかいうのではなく、そういうものだし、それが自然かもしれないとも思うのです。ゴチャゴチャの葛藤が、自然と下の子の育児には生かされ、もう少し気持ちに気負いがなくなり、自然になっていくように思われます。「下の子が可愛い」と公言するお母さんによく出会うことがありますが、それは気持ちがより自然になった結果そうなるのでしょう。時として、それが自己本位の可愛がりにつながることもあるのですが……。

二人目以降で味わった自由さを、上の子との関係に還元出来ることを願わずにはいられません。もちろんそれは一朝一夕には出来るものではないし、ひょっとしてずーっと出来ないことなのかもしれませんが、でもそういう視点を頭の片隅に置いておきたいものだと思うのです。上の子にとっても、そして私にとっても。